

『韓文考異』における朱熹の校勘方法

沼尻俊裕

はじめに

南宋の思想家であり朱子學の大成者である朱熹（一一三〇—一二〇〇）には、晩年、『韓文考異』^①（以下『考異』と略稱）という著作がある。韓愈（七六八—八二四）の詩文を校勘し、それを記録したもので、慶元三（一一九七）年^②に完成している。この『考異』について、筆者は以前、その校勘の特徴を明らかにした^③。その特徴とは、朱熹が韓愈の詩文を校勘する際、「文理意義」すなわち「文脈や文の意味」から文字の異同を判断する方法をとっていた、というものである。筆者はこの朱熹の校勘方法を「主観的」な校勘方法と捉え、それを結論とした。

しかし、テキストの校勘が、筆者の結論したように、もし「主観」によってなされていたとすれば、そのテキストは言わば意圖的に改變されたものということになってしまう。しかし、それでは文字の異同を考えて正しいテキストを求めることを目的とする「校勘」という作業そのものが成り立たない。つまり、いかなる校勘であれ、「校勘」という作業を行なっている以上、その書の校勘者は自身の校勘方法や校勘態度を客観的なものであると考えていたはずである。

また『考異』は、韓愈のテキストのそれ以降の校勘に多大な影響を與えている。具體的には、王伯大の『朱文公校昌黎先生集』^④や通行本である南宋末の世綵堂本^⑤、あるいは明の東雅堂本^⑥は、本文を校勘する際に、『考異』を使用してい

るのである。もし『考異』の校勘が「主観的に」あえて言えば「恣意的に」なされたものと見なされていたなら、このように数多くの校勘者に用いられることはあり得なかったであろう。筆者は以前、『考異』における朱熹の校勘態度を「主観的（恣意的）」だと捉えたが、それは現在の我々から見て「主観的（恣意的）」であると判断されるということであって、朱熹にとって、また『考異』を用いて校勘を行なった後世の人々にとってはそうではなかったのではないのか。彼らにとっては、何らかの「客観性」を有するものであったのではないかと推測されるのである。今回のこの小論はその点を明らかにしようというものである。

小論は次のような構成になっている。

まず『考異』の校勘方法を、方崧卿（一一三五—一九四）の『韓集舉正』^①（以下、『舉正』と略稱）との比較を通して再調査した。その結果、朱熹は『考異』以前のテキストは信頼できないものと捉えていたこと、信頼できるテキストを作成するために朱熹は、韓愈の詩文の表現面と内容面の雙方から校勘する方法を採用したこと、などを見ることできた。

次に、朱熹の採用した校勘方法について、その判断の基準やその根拠という面から調査した。その結果、文字の異同についての正誤を判断する基準や根拠は、朱熹自身の言葉としてはどこにも書かれていないことが判明した。

最後に、朱熹自身がこの校勘方法を「客観的」であると捉えていたであろう理由を、「理」「道」という言葉を中心に探ってみた。その結果、韓愈の詩文を校勘する時の判断基準は、実際に存在する何らかの具体的なテキストではなく、朱熹自身が自ら想定したところの「客観的な韓愈の詩文」ではないかと推測されるのである。

これより以降、以上の点について順次述べていきたい。

一 『韓文考異』の制作動機と校勘方法

韓愈の詩文集『韓昌黎集』は、宋代に入ると、さまざまなテキストが作られた。たとえば歐陽脩（一〇〇七—一〇七二）は「記舊本韓文後」⁽⁸⁾という文章において、幼い頃、友人の家に遊びにいった際、韓愈のテキストの端本を見つけたことを思い出し、「唐『昌黎先生文集』六卷を得、脫落顛倒して次序無し（得唐『昌黎先生文集』六卷、脫落顛倒無次序）」と述べている。また進士に合格してからのこととして、「藏する所の『昌黎集』を出して之を補綴し、人家の有する所の舊本を求めて之を校定す（出所藏『昌黎集』而補綴之、求人家所有舊本而校定之）」、あるいは「集本蜀より出づ、文字刻畫は頗る今世の俗本より精なるも、脫繆は尤も多し。凡そ三十年間、人に善本有るを聞かば、必ず求めて之を改正す（集本出於蜀、文字刻畫頗精於今世俗本、而脫繆尤多。凡三十年間、聞人有善本者、必求而改正之）」と述べている。つまり歐陽脩の時代には、韓愈の詩文のテキストはすでに数多くの種類のものが存在し、さらに歐陽脩自身も校勘作業をおこなって新たなテキストを作り出しているのである。

また方崧卿も『舉正』の序文において、『舉正』を制作する際に使用したさまざまなテキストを列挙している。石に刻まれて残された文章を集めた歐陽脩の『集古錄』や趙明誠の『金石錄』などの「石本」、また「祥符の杭本」「嘉祐の蜀本」「祕閣本」「唐の令狐氏本」「南唐の保大本」などのテキスト、さらに韓愈の數十篇の詩文を収めた趙徳の『文録』や『文苑英華』『唐文粹』などのアンソロジーである。そして、淳熙十六（一一八九）年⁽⁹⁾、方崧卿はそれらの諸本の文字の異同とその校勘結果を、『舉正』として一冊の本にまとめあげた。

この『舉正』の校勘にもとづいて、方崧卿は南安軍（現代の江西省大庾縣。軍は宋代の行政單位）でテキストを出版

した。それが「南安軍刊本」、『考異』中では「方本」と呼ばれるものである。そして、その八年後の慶元三（一一九七）年、朱熹によって『考異』が作られる。『考異』は、諸本のほかに『舉正』と「南安軍刊本」を加えて、それらにおける文字の異同を校勘し、それを記録したものである。

朱熹が『考異』を制作した直接の動機は、朱熹自身が述べているように、方崧卿の「南安軍刊本」とそれに附された『舉正』の校勘に不備があったからである。「韓文考異序」（『文集』卷七六）の書き出しは、方崧卿の校勘方法に對する批判から始まっている。

だが、方崧卿がすでに『舉正』を制作しているにもかかわらず、朱熹がさらに『考異』を作らなければならなかった理由である不備とは、具體的にはいったいどのようなことであるのだろうか。それはまずは韓愈のテキストの有り様そのものに次のような問題があったことがあげられる。

第一に、數多くのテキストがあったにもかかわらず、正しいとされるテキストがそもそも存在していなかったということである。歐陽脩の時代に、すでにさまざまなテキストが存在していたことは先に述べた。その当時、歐陽脩自身が校勘を行わなければならないと考えたのは、當時のテキストが、「脱落顛倒して次序無し」、「脱繆は尤も多し」と述べられていたように、悲惨な状態にあったからである。

このようなテキストにまつわる状況について、方崧卿は『舉正』の序文において「韓文は校本の盛行より世に全書無し」（韓文自校本盛行世無全書）と述べ、また、朱熹は「跋方季申所校韓文」（『文集』卷八三）において「余少きときより韓文を読むを喜ぶも、常に世に善本無きを病ふ（余自少喜讀韓文、常病世無善本）」と述べている。つまり、方崧卿や朱熹は、韓愈の詩文作品のテキストには正しいものが存在しないという問題が、歐陽脩の時代からおよそ一〇〇年後の時代まで綿々と續いていると考えていたのである。

その理由は『舉正』の序文にも、『考異』の序文にも、ともに引用された歐陽脩の次の發言がそのことを現している。歐陽脩は「唐田弘正家廟碑」⁽¹⁾で、「今碑を以て集を校すに印本初め未だ必ずしも誤らず、多く校讎する者の爲に妄りに之を改めらる（今以碑校集印本初未必誤、多爲校讎者妄改之）」と述べている。歐陽脩のこの發言は碑文について述べられたものであるが、方崧卿も朱熹もそのことは韓愈のテキスト全體に及んでいる問題であると捉えていた。⁽²⁾ すなわち『舉正』や『考異』が制作される前に存在していた韓愈の詩文作品のすべてのテキストは、程度の差はあれ「妄りに改め」られたものだと考えていたということである。

そこで「妄りに改め」られたテキストを如何に正しいテキストに戻すのか、それが校勘者である方崧卿と朱熹の課題となる。そして、方崧卿の取った校勘方法と朱熹のそれとは、ある意味で正反對のものであった。

方崧卿の校勘方法は次のような手順を踏んでなされている。まず石に刻まれて残された碑文など十八の文章を基準として、「祥符の杭本」「嘉祐の蜀本」「祕閣本」の三種のテキストを底本として選定する。次にその三種類の底本を基準として、他のテキストとの異同を比較して文字を定める、というものである。

しかし朱熹は方崧卿のこの方法について、「本を信じて而して理を信ぜず（信本而不信理）」と批判している。それは、朱熹が『舉正』の底本である三種のテキストの成立そのものが、信用に値しないものとして考えていたからである。「韓文考異序」には次のように述べられている。

其の（歐陽脩―筆者補）自ら「兒童爲りし時、蜀本韓文を隨州李氏に得」と言ふを觀るに、其の歲月を計れば、當に天禧中年に在るべし。且つ其の書已に故弊脱略すれば、則ち其の摹印の日は「祥符の杭本」と蓋し未だ其れ孰れか先なる孰れか後なるを知らず。而して「嘉祐の蜀本」は又其の子孫なること明らかなり。然り而して猶ほ（歐

陽脩（筆者補）曰く、「三十年間、人に善本有るを聞かば、必ず求めて之を改正す」と。則ち固より未だ嘗て必ずしも「舊本」を以て是と爲し悉くは之に従はざるなり。「祕閣官書」に至りては、則ち亦た民間の獻ずる所、掌故令史の抄する所にして一時の館職の校する所なるのみ。其の傳ふる所の者は、豈に眞に作者の手稿ならんや。而も之を是正する者、豈に盡く劉向・揚雄の倫ともがらならんや。（觀其自言「爲兒童時、得蜀本韓文於隨州李氏」、計其歲月、當在天禧中年。且其書已故弊脫略、則其摹印之日、與「祥符杭本」蓋未知其孰先孰後。而「嘉祐蜀本」又其子孫明矣。然而猶曰、「三十年間、聞人有善本者、必求而改正之」。則固未嘗必以舊本爲是而悉從之也。至於祕閣官書、則亦民間所獻、掌故令史所抄而一時館職所校耳。其所傳者、豈眞作者之手稿。而是正之者、豈盡劉向揚雄之倫哉。）

『文集』卷七六

朱熹の見解をごく簡単にまとめれば、次のようになる。

まず、歐陽脩が幼い頃、友人の宅で得た韓愈の「蜀本」の端本は、年代から推測して天禧（一〇一七—一〇二二）年間のものであり、破損を考慮すると、大中祥符（一〇〇八—一〇一六）年間の「杭本」とどちらが先に刊行されたテキストか分からない。嘉祐（一〇五六—一〇六三）年間の「蜀本」は、歐陽脩の「蜀本」系列のテキストであることは疑いない。なお歐陽脩は、三十年間も善本を尋ねて校勘し続けている。古いテキスト（「蜀本」）が正しいと鶴呑みしているわけではないのだ。つまり「祥符の杭本」も「嘉祐の蜀本」も、古いテキストゆえに正しいと言ふことはできない。

また「祕閣官書」（祕府の藏書）は、民間からの獻上物や下級の役人が書寫したもので、一時期祕府の役人になった者が校勘したもののばかりである。これは本當に作者の手書とは言えない。さらに校勘した者は、劉向や揚雄のような能力があるわけではない。宮中の藏書ゆえに正しいテキストである、とは言えない。

以上のことから『舉正』が底本とした「祥符の杭本」「嘉祐の蜀本」「秘閣本」という三種類のテキストは、朱熹にとってはその成立からしてどれも信賴できないものだったのである。

さらに朱熹は、テキストについて「書韓文考異前」に、

苟も是なれば則ち民間近出の小本と雖も敢へて違へず。未だ安んぜざる所有れば則ち官本・古本・石本と雖も敢へて信ぜず。(苟是矣則雖民間近出小本不敢違。有所未安則雖官本古本石本不敢信。)『文集』卷七六

と述べている。筆者は先に、朱熹が韓愈の詩文を校勘する際、「文理意義」すなわち「文脈や文の意味」から文字の異同を判断するという方法をとっていると述べた。つまり、朱熹は、そのテキストのある部分を「是」であるとは判断したり、また「未だ安んぜざる所」であると判断したりするその判断の規準は、韓愈の詩文の「文理意義」(文脈や文の意味)に基づいて決定されるものである、としているのである。朱熹にとって校勘するうえで大事なことは、あくまでもテキストの「文理意義」(文脈や文の意味)であり、テキストそのものの成立過程などではなかった。それらは、もともと判断の根據にならないことだったのである。

朱熹が方崧卿の方法を「本テキストを信じて理を信じない」ものと見なしたのとは反対に、彼自身がとった「方法」は「理を信じて本を信じない」という方法であった。

では、朱熹のとった『考異』の「本テキストを信じて理を信じない」という校勘方法は実際にはどのようなものであったのだろうか。

小論の冒頭で述べたように、筆者は以前、韓愈の詩文を校勘する際、朱熹は「文理意義」(文脈や文の意味)から、すなわち「文脈や文の意味」から文字の異同を判断するという方法をとっていたことを明らかにした。しかしこのたびの再検討によって、『考異』は単に「文理意義」という内容面から校勘するだけでなく、ど、の、よ、う、に、書、か、れ、て、い、る、の、か

という「表現面」から判断する校勘もなされていることが分かった。「韓文考異序」に次のような文章がある。

讀む者は正に當に其の文理意義の善き者を選びて之に従ふべし、當に但だに地望形勢を以て重輕と爲すべからざるなり。抑も韓子の文を爲るや、「力めて陳言を去る」を以て務めと爲すと雖も、而れども又必ず「文從ひて字順ひ、各々其の職を識る」を以て貴と爲す。讀む者或いは未だ此の權度を得ざれば、則ち其の文理意義、正に自ら未だ言ひ易からざる者有り。（讀者正當擇其文理意義之善者而從之、不當但以地望形勢爲重輕也。抑韓子之爲文、雖以力去陳言爲務、而又必以文從字順各識其職爲貴。讀者或未得此權度、則其文理意義、正自有未易言者。）『文集』卷七

六

傍點部は、次のようなことを述べている。韓愈が詩文を作るときには、使い古された言い回し（陳言）を用いないことに力を注いでいた。しかしそれだけではなく、さらに必ず「文從ひて字順ふ（文從字順）」ことにあわせて表現を變えることを重んじていたのである。讀者はおそらくこの表現の規準（權度）がきちんと理解できなければ、その「文理意義（文脈や文意）」については簡單には言えないだろう、と。

朱熹は韓愈の詩文の文脈や文意を捉えるためには、まず「陳言」をなくしているか、そして「文從ひて字順ふ（文從字順）」ようになっているかどうか、といった「表現面」を捉えることが必要だと述べているのである。

ここでいう「表現面」というのは、清水茂氏が「表現の技術に對する態度」と述べているものと同じである。また清水氏は、韓愈がこの「力めて陳言を去る（力去陳言）」と「文從ひて字順ふ（文從字順）」という二つの表現の技術をうまく調和させたために、韓愈の詩文はすぐれた文學になっているとも述べている。

『考異』は「文理意義」（文脈や文の意味など）という「内容」の面からの校勘をおこなっている。しかし、韓愈の詩文には「表現」面での工夫が施されており、それを無視してただ單に「内容」の面を見るだけでは、韓愈の詩文を正し

く理解したことはない。そこで朱熹は「内容」面での校勘の前提条件として、まず韓愈の「力めて陳言を去る（力去陳言）」と「文従ひて字順ふ（文従字順）」という「表現」の「技術に對する」ふたつの「態度」を理解しなければならぬと言っているのである。

さて『考異』には、今述べたように、わずかながら表現面からの校勘が存在する。そこで表現面の校勘の記述から、朱熹の校勘方法の特徴について見ておきたい。その特徴とは、朱熹は、『考異』以前のテキストは校勘によって「奇抜な表現」へ變えられてしまったと認識していたこと、そして、『考異』はそのような「奇抜な表現」を「ありふれた表現」に戻す校勘作業を行っているということである。

ではまず、朱熹が『考異』以前のテキストは校勘によって「奇抜な表現」へ變えられてしまったと認識していたという点から見ていきたい。まず古詩「南山詩」の「衆皴」という詩語の校勘について、朱熹は、まず方崧卿の校勘に對して長々と批判する。そのあとで、次のように述べている。

大氏 今人の公（韓愈―筆者補）の文に於けるや、其の「力めて陳言を去る」の工爲るを知るも、其の「文従字順」の貴爲るを知らず。故に其れ恠を好んで常を失ふ、類多く此くの如し。（大氏今人於公之文、知其「力去陳言」之爲工、而不知其「文従字順」之爲貴。故其好恠失常、類多如此。）『考異』卷一

この文章で言っているのは、次のようなことである。だいたい今の人は韓愈の詩文について、「力めて陳言を去る（力去陳言）」という技巧が施されていることは分かっているが、韓愈が「文従ひて字順ふ（文従字順）」を重んじていたことを分かっていない。だから奇抜な表現を好んで、ありふれた表現をなくしてしまう。そのような校勘が多いのだ、と。

ここから朱熹は「力めて陳言を去る（力去陳言）」を「恠」（怪）すなわち「奇抜な表現」、「文従ひて字順ふ（文従

字順)を「常」すなわち「ありふれた表現」と捉えている。そして朱熹は、韓愈の「表現」の技術について「今人の認識が「奇抜な表現」だけを追い求め、分かりやすい「ありふれた表現」を見失っている、と考えているのである。

また「言箴」という文章の「以汝爲叛」「以汝爲傾」という箇所の校勘では、

「以汝」、方は並びに「汝以」に作る。○今按ずるに近世の校本務めて新奇を爲す、多く倒語を作り、文乖そむき字逆さからふ。幾んど歐陽公の譏る所の石公操の作字の恠に類し、殊に韓公の立言の本意を失ふ。今悉く之を正す、敢へ

て従はざるなり。(「以汝」、方竝作「汝以」。○今接近世校本務爲新奇、多作倒語、文乖字逆、幾類歐陽公所譏石公操作字之恠、殊失韓公立言本意。今悉正之、不敢従也。)『考異』卷四

と述べている。表現面について、朱熹はここで「近世の校本務めて新奇を爲す」と言い、近ごろの校勘されたテキストも、韓愈の詩文を「新奇」な表現すなわち「奇抜」な表現の方向に變えていると苦言を呈している。

そして、「大氏方(崧卿―筆者補)の意は専ら奇澀を主とす(大氏方意専主奇澀¹⁶)」や「大氏方(崧卿―筆者補)の意は奇を以て主と爲す(大氏方意以奇爲主¹⁶)」、「今按ずるに方本(南安軍刊本―筆者補)文理無し。蓋し其の意は本を信じて理を信ぜず、奇を好んで常を喜ばず(今按方本無文理。盖其意信本而不信理、好奇而不喜常¹⁷)」と、「奇」(奇抜な表現)に流れる方崧卿の校勘を手きびしく批判しているのである。

以上のことを整理すると次のようになる。まず『韓昌黎集』の成立当初には、韓愈の詩文には、一見相反すると思われる「力めて陳言を去る(力去陳言)」「(奇・怪)と」「文従ひて字順ふ(文従字順)」「(常)という二種類の表現の技術が用いられていると考えられていた。そして、先に挙げた歐陽脩の「唐田弘正家廟碑」の言葉にもあるように、最初の版本が校勘する者の手によって次第に「妄改」、すなわちでたらめに改變されてゆく。このでたらめな改變を「表現」の面からみたばあい、朱熹はすべて「奇抜な表現」の方向に傾いてしまったと考えている。そして、朱熹は『考異』

において、このようにでたらめに改変された韓愈の詩文の表現を、「奇」なるものから「常」なるものへ戻すという作業をおこなっているということである。

では、『考異』にはそれとは反対に、「常」から「奇」の方向へ改める校勘は存在しないのだろうか。

韓愈の詩文の表現の中で、この表現は「奇」であると、朱熹がコメントしているものはほとんどない。筆者が調査した結果、確認することができたのは、次の一例だけである。

「鑿」或いは「巉」に作る。方は「九疑は鑿天と言ひ、洪濤は春天と言ふ。皆奇語なり」と云ふ。（「鑿」或作「巉」。方云「九疑言鑿天、洪濤言春天。皆奇語也。」）『考異』卷二

この文章は、古詩「送區弘南歸」の「鑿天」という詩語に對する校勘である。この箇所では、「鑿天」という詩語を「奇語」と捉えている。しかし、それは方崧卿の文章を引用したものであり、朱熹自身の發言ではない。韓愈の詩文が「奇拔な表現」を用いていたことについては、それまでの校本も方崧卿も朱熹もすべての者が共通して認識していた。しかし、朱熹は『考異』以前の校勘は「常」なる表現をでたらめに「奇」なる表現に變えてしまっていると考えた。朱熹はあくまでも、これまでに校勘されてきたテキストは「奇」という表現を追求するあまり、「常」という表現を失ってしまっていると批判しているのである。言い換えれば、従來の校勘者たちは、韓愈の文章には「文從ひて字順ふ（文從字順）」という側面があることを考慮に入れていない、朱熹はそのことを問題視しているということである。そのためであろう、朱熹には「常」の箇所を「奇」に變えようとする意識はなく、また實際にそのような校勘も存在していない。

以上、『考異』の制作動機と校勘方法について検討してきた。朱熹が『考異』を制作したのは、『舉正』と同じく、韓愈の従來のテキストそのものにまともなものがなかったからである。しかし、その校勘方法は、『舉正』とは正反對の

ものであった。朱熹は「妄りに改め」られたそれまでのテキストを、詩文の「表現」と「内容」というふたつの面から校勘するという方法をとった。具體的には、まず、表現面の理解をおこない、その上で内容面に踏み込んで校勘を行うという方法である。そして、その表現面についての朱熹の基本的な理解は、それまでの校勘はすべて「奇」、すなわち「奇抜な表現」に變えてしまっているというものであった。そのために『考異』の校勘は、この誤って「奇」（奇抜な表現）に變えられてしまったものを、本來そうであったと推測される「常」（ありふれた表現）に戻すというものだったのである。

二 『韓文考異』における校勘の実態

たしかに韓愈は、自分の作品の表現について「力めて陳言を去る（力去陳言）」（『答李翊書』）とか、「文從ひて字順ふ（文從字順）」（『南陽樊紹述墓誌銘』）と述べている。しかし、韓愈その人ではない朱熹が、どうして韓愈の個々の詩文の表現が、それぞれ「奇」であるとか、あるいは「常」であるとかと判断しえたのであろうか。その根拠はいつたいどこにあったのであろう。ここでは『考異』における朱熹の校勘方法の判断基準やその根拠について検討したい。

『考異』には二つの方法が用いられている。一つは「奇」なる表現から「常」なる表現へ戻すという表現面における校勘方法であり、もう一つは「文理意義」（文脈や文の意味など）から正しいものを判断するという内容面における校勘方法である。さらに内容面については、韓愈自身の別の作品の言葉を根拠として判断をくだした箇所がいくつか存在する。これらの記述を見てみると、朱熹が正しいと判断した基準や根拠は、朱熹自身の言葉としてはどこにも書かれていないのである。

では、まず前節で示した「韓文考異序」について、その内容を今一度、見ておきたい。

(A) 讀む者は正に當に其の文理意義の善き者を選びて之に従ふべし、當に但だに地望形勢を以て重輕と爲すべからざるなり。抑も韓子の文を爲るや、力めて陳言を去るを以て務めと爲すと雖も、而れども又必ず文從ひて字順ひ、各々其の職を識る」を以て貴と爲す。(B) 讀む者は或いは未だ此の權度を得ざれば、則ち其の文理意義、正に自ら未だ言ひ易からざる者有り。

この文章の傍點部Aの「讀む者は正に當に其の文理意義の善き者を選びて之に従ふべし」というのは、「讀者は、韓愈の詩文の文脈や文意の善いものを選んで、それに沿って理解すべきである」と述べたものである。朱熹は内容面の校勘について「文理意義の善き者を選」ぶとしている。しかし、その選擇が「善」いものであると判斷する客觀的な根據はどこにあるのであろうか。ここには何も書かれていない。

また傍點部Bの「讀む者は或ひは未だ此の權度を得ざれば、則ち其の文理意義、正に自ら未だ言ひ易からざる者有り」というのは、讀者は、おそらくこの(「力めて陳言を去る(力去陳言)」「文從ひて字順ふ(文從字順)」という)表現の規準がわからなければ、「文理意義(文脈や文意)」については、簡單には言えないだろうということである。朱熹は内容面の校勘を行なう前提條件として「力めて陳言を去る(力去陳言)」「文從ひて字順ふ(文從字順)」という表現の「權度」、すなわち「規準」を理解しなければならないと述べる。しかし、それがどのような「權度(規準)」であるのか。ここには具體的な記述はなく、どのようなものであるのか分からない。

この序文には校勘の方法は書いてあっても、判斷の基準までは書かれていない。ただ、朱熹自身は「文理意義の善き者」を選択でき、表現の「權度(基準)」も理解できると自認していたということであろう。

そこで、實際に校勘をおこなった際のコメントから、判斷の基準や根據を見てみることにしたい。

まず表面面の判断の根據について『考異』には次のような二つの文章がある。一つは、古詩「重雲」の「天行失其度」という一句についての校勘の文章である。

方は「天行令失度」に作り、「公の詩語は此の一體を用いること多し」と云ふ。○今按ずるに諸本は皆「天行失其度」に作り、文意自ら通ず。公の詩は閒々方の説の如き者有ると雖も、然れども亦た専らは此を以て奇と爲さざるなり。（方作「天行令失度」云「公詩語多用此一體」。○今按諸本皆作「天行失其度」、文意自通。公詩雖閒有如方説者、然亦不專以此爲奇也。）『考異』卷一

もう一つは「爲河南令上留守鄭相公啓」という文章の「得一事爲名可自罷去」という箇所の校勘の次のような文章である。

○又按ずるに此の二書の誤字尤も多く、而るに閣・杭・蜀本は又特に甚しき爲り、何の故に此くの如くなるかを知らず。大氏公の朝廷或いは上官に抵てて時事及び職事を論ずるに於けるや、則ち皆公の狀の體の如く、古文の奇語を用ひず。此の二篇も亦た其の類なり。竊かに意ふに讀む者は其の奇無きを厭ひて、輒ち之を改む、故に其れ誤ること多く此に至るとしか云ふ。（○又按此二書誤字尤多、而閣・杭・蜀本又爲特甚、不知何故如此。大氏公於朝廷或抵上官論時事及職事、則皆如公狀之體、不用古文奇語。此二篇亦其類也。竊意讀者厭其無奇、而輒改之、故其多誤至此云。）『考異』卷五

それぞれ「表現」について言及しているところに注目してみると、「公の詩は閒々方の説の如き者有ると雖も、然れども亦た専らは此を以て奇と爲さざるなり」や、「大氏公の朝廷或ひは上官に抵てて時事及び職事を論ずるに於けるや、則ち皆公の狀の體の如く、古文の奇語を用ひず」というようなことがあげられる。朱熹は、韓愈の詩を大抵は「奇」に作らないし、「狀」や「啓」という特定の文體についても、それらの文體の文章では「奇語」を使わないと判断してい

る。しかしその判断の根據については、何も書かれていない。

また次の文章は、「言箴」という文章の「以汝爲叛」「以汝爲傾」という箇所の校勘についてのコメントである。前節ですでに引いたものであるが、煩をいとわず再度示しておきたい。

「以汝」、方は並びに「汝以」に作る。○今按ずるに近世の校本、務めて新奇を爲す、多く倒語を作り、文乖き字逆らふ。幾んど歐陽公の譏る所の石公操の作字の恠に類し、殊に韓公の立言の本意を失ふ。今悉く之を正す、敢へて従はざるなり。

「言箴」の全文は、次のとおりである。

言を知らざるの人は、烏んぞ與ともに言ふべけんや。言を知るの人は、默焉として其の意已に傳ふ。幕中の辯、人は反って汝を以て叛くと爲す、臺中の評、人は反って汝を以て傾くと爲す。汝懲りざらんや、而して呶呶として以て其の生を害せんや。(不知言之人、烏可與言。知言之人、默焉而其意已傳。幕中之辯、人反以汝爲叛、臺中之評、人反以汝爲傾。汝不懲邪、而呶呶以害其生邪。)

「言箴」という文章はこれで全文である。きわめて短い。方崧卿は、この文章のなかの傍點部を「汝＋以」という順にしているが、朱熹はそれを「以＋汝」の順にすべきだとしているのである。

この校勘は、韓愈の詩文の語順の轉倒⑯についての校勘である。「汝」という字を代名詞、「以」という字を介詞と捉えた場合、この語順の轉倒については鮑善淳⑰氏の發言が参考になるかと思われる。鮑氏は「古文」の文章は現代の文章とは異なった文法による表現がある指摘し、次のように述べている。代名詞は「先秦の古文中には、何の條件もなしに直接動詞または介詞の前に置かれて、目的語になっている代名詞を見出すことも出来る」と。そして、その例として『詩經』小雅・節南山の「爾瞻」や『孟子』告子の「自爲」を挙げている。そして「三代兩漢の書を熟讀した韓愈も、古文

この現象に注意を向け、多くの模倣を加えた」と述べる。さらに、その用例として、韓愈の「平淮西碑」という文章の「度、惟汝予同（度、惟だ汝のみ予と同じ）」、また「送窮文」という文章の「惟我保汝、人皆汝嫌（惟だ我のみ汝を保つ、人皆汝を嫌ふ）」という動詞と代名詞の組み合わせを挙げ、それぞれ「『予同』は『同予』である」、「『汝嫌』は『嫌汝』である」と指摘している。

この「言箴」の箇所も、代名詞「汝」と介詞「以」との組み合わせであるから、方崧卿の『舉正』にしたがって、テキストを「幕中之辯、人反汝以爲叛、臺中之評、人反汝以爲傾」と作っても、おそらく何の問題もない。鮑氏に従えば、むしろ、その方が韓愈の原文に近いのかもしれない。一方、鮑氏が韓愈の用例として挙げた「平淮西碑」の「予同」や「送窮文」の「汝嫌」については、朱熹は校勘を行っていない。なぜ「言箴」のこの箇所だけに校勘を施したのか。その客観的な根拠は、どこにも書かれていない。

次に内容面の判断の根拠について具体的に見てみたい。内容面からの校勘は、『考異』の校勘記のほとんどを占める。ここでは文脈によって校勘しているものと典故にもとづいてそうしているものを、それぞれ一例ずつを挙げておきたい。まず「題哀辭後」という文章の「乎古道」という箇所についてのものである。

「乎」或いは「於」に作る。方は三本に従ひ「道」字無し。上下の文を以て之を考ふれば、「道」字無きは即ち文理を成さず。（「乎」或作「於」。方従三本無「道」字。以上下文考之、無「道」字即不成文理矣。）『考異』卷六

朱熹は、この文章で「道」字がないのは「文理」（文脈）をなさない、と述べている。

この箇所の校勘を、それぞれ『舉正』の場合と『考異』の場合とで原文に當てはめてみると次のようになる。

『舉正』 〓思古人而不得見、學古道則欲兼通其辭。通其辭者、本志乎古者也。古之道、不苟譽毀於人。

『考異』 〓思古人而不得見、學古道則欲兼通其辭。通其辭者、本志乎古道者也。古之道、不苟譽毀於人。

この二つの文章を「文理」（文脈）から見た場合、次のようなことが考えられる。

まず、『舉正』の場合の文脈をみると、「古人」↓「古道」↓「志乎古者」↓「古之道」と、すべて「古」といふ言葉でくくられる。『舉正』にもとづけば、この文章の焦點は「古」字にある。

一方、『考異』の場合はどうであろうか。それは「學古道」↓「志乎古道」↓「古之道」というように、「古道」といふ言葉が文章を貫いている。そのために「古」字は「道」字の修飾語にすぎず、文章の焦點はあくまでも「道」字にあることが見て取れる。『舉正』と『考異』では、焦點とする言葉には差異が認められるのである。しかし『考異』にならって上下の文章を含めた文脈を眺めたとき、朱熹が強調するほど方崧卿が『舉正』において校勘した文章は、まったく「文理を成さ」ないものであるだろうか。筆者にはそうではないように思える。これでも十分に文章として成り立ち、「文理を成」しているように感じられる。

しかし、朱熹は「道」字がなければ「文理」が成り立たないと判断した。「道」という一字を缺けば、文脈が成り立たなくなる、と断定したのである。だが、その判断の根拠は何であろうか。それはどこにも書かれていない。

また内容面の校勘では、典故の使用について、「原道」という文章の「非天小也」という箇所の校勘に次のような記述がある。

「天」の下に或いは「之」字有り。「小」、方は「罪」に作り『尸子』曰く、井中に星を視るに、視る所數星に過ぎず、と」と云ふ。○今按ずるに韓公は未だ必ずしも『尸子』の語を用いず、正に之を用いて「罪」に作らしむるも亦た文意に非ず。〔天〕下或有「之」字。「小」、方作「罪」云、「尸子』曰、井中視星、所視不過數星」。○今按韓公未必用『尸子』語、正使用之作「罪」亦非文意。『考異』卷四

朱熹は、韓愈が『尸子』の言葉を使っていると判断した。⁽²¹⁾しかし、なぜ韓愈が『尸子』の言葉を使っていないと言

えるのだろうか。その判断の根據も、やはり、どこにも書かれていない。

以上、表現面の校勘、内容面の校勘について、それぞれ『考異』の校勘の實態を見てきた。朱熹が韓愈の詩文を校勘する際、その判断の基準や根據としたものは、すでに何度も指摘したように、朱熹自身の言葉としてはどこにも書かれていないのである。では、朱熹の判断の基準や根據は何であったのか。

三 朱熹の判断の基準・根據

『考異』における朱熹の判断の基準や根據は、朱熹自身の言葉としてはどこにも書かれていない。しかし、その基準や根據は、朱熹の頭のなかではたしかに存在し、客觀的基準となっていたはずである。だとすれば、「文理意義の善き者」の選擇も、表現の「權度（規準）」の理解も、あくまでも朱熹にとっての「選擇」であり、朱熹自身の「權度（規準）」だったのではないか。朱熹の頭のなかには「客觀的な韓愈の詩文」が存在していたのではないのかと推測されるのである。

このような推測の正しさを證據づけるものとして『考異』のなかの次のような校勘の記述を舉げておきたい。「與孟東野書」という文章の「其於人人」という箇所についての校勘は次のようである。

或いは下の「人」字無し。説は前卷の「答張籍書」に見ゆ。或いは「它人」に作るは是に非ず。方は此の四字無し。（或無下「人」字。説見前卷「答張籍書」。或作「它人」非是。方無此四字。）『考異』卷五

そして、その「答張籍書」という文章の「人人」についての校勘は次のようである。

上の「人」字は或いは「衆」に作る。○今按ずるに「人人」は乃ち衆人の義なり。此の篇の下文及び後の「與孟東

野書」、別本の「歐陽詹哀詞」皆之れ有り。然れども它書に見えず。疑ふらくは當時の俗語なり。（上「人」字或作「衆」。○今按「人人」乃衆人之義。此篇下文及後「與孟東野書」、別本「歐陽詹哀詞」皆有之。然不見於它書。

疑當時俗語也。）『考異』卷五

『考異』のなかにはこのように、韓愈の詩文を、それとは別の韓愈の詩文で校勘している箇所が少なくない。朱熹が韓愈の詩文を、別の韓愈の詩文を根據にして校勘している例である。

ふつうに考えれば、校勘するテキストの校勘を、それと同一のテキストを用いて校勘するとすれば、當然、そこに自家撞着をおこす可能性を考えないわけにはいかない。ここも、「人人」という字の校勘について、「與孟東野書」は「答張籍書」を根據に用い、「答張籍書」は「與孟東野書」を根據に使用しているのである。

しかし、朱熹自身はその方法が自家撞着を引きおこさないと考えていたにちがいない。そうでなければこのような校勘はそもそも成立し得ない。したがって、校勘の根據として引かれたテキストは、朱熹の頭のなかでは、すでに「客觀的」なものとして存在していたということであろう。このような校勘方法は、そのようであってはじめて可能となるはずである。

すなわち『考異』の校勘は、朱熹の想定する「客觀的な韓愈の詩文」がまず朱熹の頭のなかに存在し、それを判斷の根據として校勘をおこなっていると判斷されるのである。だからこそ、ある詩文の表現については、それは「奇」である、あるいは「常」であると捉えることができ、ある詩文の内容については「文理を成さない」と言い切れ、ある詩文の典故については、その語の典故はその本のものではないと判斷できたのだと思われる。

さらに朱熹自身の表現によれば、『考異』の校勘方法は「理を信じて本を信じない」ものであった。この「理」という言葉は、方崧卿の校勘方法を批判するときには「文理」（文脈）を意味している。しかし「文理」という言葉を「文

の「理」として捉えた場合、もうひとつのことを考えておく必要がある。それは、『考異』の校勘方法は、朱熹のいわゆる「科學的合理主義」とも関係があると推測されるということである。

金谷治氏⁽²²⁾は、「古典を読むのに、それが傳説どおりの古書であるかどうか、その眞僞を吟味することが必要だとする認識は、朱子においてははっきり確立されている」として、その方法が「科學的な方法」であると述べている。「傳説どおりの古書」とは『尙書』や『周禮』など經書を指している。そこで、テキストの「眞僞を吟味する」この「科學的な方法」を『考異』の校勘方法についてあてはめてみれば、小論の第一節で、『舉正』の底本とした三種類のテキストについて詳細に検討した文章（「韓文考異序」）が同様のものと考えられよう。またこのことは、朱熹の校勘方法が「理」を信じ「本」^{テキスト}を信じないことの立脚点になっているものと思われる。

金谷氏は先の文章に續けて、次のように述べている。

ただ、ここで注意すべことがある。朱子は『周禮』の文章を新しいと見たが、周禮六官の制度を尊重する主觀から、それを僞作とすることはできなかつた。……古書の僞作を疑う科學的合理主義の立場と、道學の大成者にふさわしい哲學的な立場とのきしみあう音が聞こえてくる。朱子はそれを矛盾とはしない。そこに、注意すべき朱子の合理主義の特色がある。……朱子にとっての學問とは、もちろん古典の僞をあばくことではなかつた。古典がいかに疑わしいとしても、それを通して儒教の眞髓を探ることが重要であつた。中心の眼目はこちらにある。……朱熹の合理主義は疑わしいものを疑わしいとせずにはおれない。しかしまた同時に、その合理主義はその疑問をどこまでも追求することを許さない。（傍點、筆者）

朱熹の合理主義とは、このように「科學的」な立場と「哲學的」な立場との對立によって生じた矛盾を、矛盾のまま抱えたものようである。また金谷氏の言葉を借りれば「科學的合理主義からみれば不徹底としか言いようがない」もの、

ということである。

以上のことから推測すると、朱熹が『考異』で行った校勘の本當の目的は、最終的には韓愈の詩文から「理」や「道」を探るための校勘だったのではないだろうか。朱子はその「合理主義」によって、韓愈のテキストを疑った。朱熹は「本」^{テキスト}を信じない。信じるのは「理」である。つまり、朱熹にとって、「理」や「道」を読みとることが可能なものこそが、「正しい韓愈のテキスト」だったのではないか。

また『考異』の制作は朱熹の晩年である。その時、朱熹の思想はすでに完成されていると考えれば、この朱熹の「客観的な韓愈のテキスト」は、あるいは朱熹のもつ理氣學や合理主義に基づいて想定されたものではないかとも推測される。

さて、朱熹の想定したこのような「客観的な韓愈のテキスト」は、朱熹にとっては「客観的」であっても、現代の我々から見れば、やはり朱熹の「主観」でしかない。小論は、『考異』の校勘方法をひとまず「客観的なもの」であると假定して検討してきた。しかし、實は朱熹が「客観的なもの」として想定した「主観的な基準」の上に構築されたものだったのではないのか。それが小論の結論である。

おわりに

莫砺鋒²³氏は、『考異』を朱熹の高い見識と讀書に支えられたすぐれた著作であるとする。莫氏の言うとおり、たしかに『考異』の校勘記には朱熹の長年にわたる學問の成果が現れていると思われる。しかし「校勘」という面から捉えれば、『考異』の校勘方法は一見論理的で客観的に構築されているように見えるが、現代の我々から見た場合、その方法

は朱熹が「主観的」に想定したものを根據にしてなされたものではないかと考えられる。もしそうであれば『考異』によって韓愈のテキストを校勘すれば、その結果、作られたものは、本来の「正しいテキスト」ではなく、朱熹の「主観」によって變形されたものに基づいて行なっていることになる。

そして我々が現在、使用している韓愈のテキストは、通行本である世綵堂本、またはその世綵堂本を底本として校勘されたテキストである。その世綵堂本は、本文の校訂に『考異』を利用している。従来、韓愈の詩文の研究では、通行本である世綵堂本の特徴について詳細に検討しているものは、ほとんど見られない。また世綵堂本の本文の校勘に、『考異』が用いられていることもほとんど意識されることはなかった。それは、校勘者である朱熹の主観は、韓愈の作品の原文には影響せず、あくまでも客観的になされたものだと、無意識のうちに了解してきたからではないだろうか。

そして、朱熹の『考異』の後世への影響を考えてみるに、朱熹より以降に編纂された韓愈の詩文のテキストの本文そのものを、大きく決定づけたことは否定できない。だとすれば『考異』によって本文を校勘されたテキストを無意識のままに利用することは危険ではないだろうか。『考異』の校勘は實は朱熹がその主観によって、「客観的である」と想定したところの主観的な「テキスト」である可能性がある。つまり、通行本、あるいは通行本を底本にしたテキストを使用すれば、韓愈の詩文のなかに朱熹の主観が混入することになりかねない。言い換えれば、通行本で韓愈を讀むという行為は、實は、「韓愈の詩文」そのものを讀んでいるのではなく、「朱熹というフィルターを通した韓愈の詩文」を讀んでいることになるのかもしれないということである。

そして朱熹の影響をうける前になされた方崧卿の『舉正』と南安軍刊本は、朱熹の批判に反して、また、朱熹以降の人々、あるいは現代の我々の使用状況やそれに對する關心の低さに反して、むしろもっと高い利用價值を持つのではないのか。もう一度、方崧卿の『舉正』や南安軍刊本を見直し、再検討する必要があるのではないのか。最後にこのこと

を指摘して小論を閉じたいと思う。

以上、『韓文考異』における朱熹の校勘方法の實態について、明らかにしてきた。本稿の検討に誤っている點、不十分な點などあるものと思われる。ご批正をいただければ幸いです。

注

- (1) 『考異』は宋刻影印本『昌黎先生集考異』（上海古籍出版社、一九八一）を用い、以下『考異』の文章の引用も同書による。また『朱文公集』（小論中では『文集』と略稱）の文章の引用は、郭齋・尹波點校『朱熹集』（四川教育出版社、一九九六）により、併せて卷數を列記する。
- (2) 『考異』の成立年代は、東景南『朱熹年譜長編』（華東師範大學出版、二〇〇二）に據る。
- (3) 拙論「朱熹『韓文考異』小考——『韓集舉正』との校勘方法の比較から——」（大東文化大學『中國學論集』第十九號、二〇〇二）。
- (4) 題名の通り、朱熹の『考異』に従って作られたテキストである。寶慶三（一二二七）年序刊。『四部叢刊』には、『朱文公校昌黎先生文集』四十卷・外集十卷・遺文一卷の元刊本が收められている。
- (5) 世綵堂本は、宋版の完本が北京圖書館に收藏されている。一般的に通行する本として、現在研究の底本には上海蟬隱廬影印本が用いられている。屈守元・常思春主編『韓愈全集校注』（四川大學出版社、一九九六）の解説は、世綵堂本の特徴を「正文爲采朱熹校本、校語悉用朱子『考異』、而朱子本之方崧卿『舉正』、方氏所參校之本、皆記其來源、朱子但稱一本・或本、廖氏亦從同而已。廖本不僅校語削去方・朱及所據諸家姓名、采錄五百家注、亦一律削去所采各家姓名」と述べている。
- (6) 『四部備要』本『韓昌黎全集』（臺灣中華書局、一九六六）は、東雅堂本校刊『昌黎先生集』を收め、清の陳景雲の『韓集點勘』四卷を附す。陳景雲の「韓集點勘書後」によれば、明の東雅堂本は、宋末の世綵堂本を覆刻したものであり、同一系統のテキストである、とする。
- (7) 『韓集舉正』は、大倉文化財團所藏本の影印本（佐藤保解題、『古典研究會叢書』漢籍之部第三十九卷、汲古書院、二〇〇二）を用いる。
- (8) 『歐陽文忠公文集』卷六十七「外集」二十三、所收。

- (9) 『舉正』の自跋の末に「淳熙己酉二月朔日、莆田方崧卿書」と記していることによる。
- (10) 「韓文考異序」は「南安韓文出莆田方氏、近世號爲佳本。予讀之信然。然猶恨其不盡載諸本同異、而多折衷於三本也」というように、方崧卿の南安軍刊本と『舉正』の批判から始まる。
- (11) 『歐陽文忠公文集』卷一百四十一「集古錄跋尾」八、所收。
- (12) 『舉正』の序文は「韓文自校本盛行世無全書。歐公謂、韓文印本初未必誤、多爲校讎者妄改」という文章から始まる。また朱熹の「韓文考異序」(『文集』卷七六)では、方崧卿が使用した三種類の底本を批判したあと、「然如歐陽公之言、韓文印本初未必誤、多爲校讎者妄改」と述べている。
- (13) 『考異』卷五「與孟東野書」という文章の「春且盡時氣向熱」の箇所の校勘。原文は、「方本『盡時』作『時盡』、『向』作『日』。○今按方本無文理。蓋其意信本而不信理、好奇而不喜常。故其所取每得乖戾暗澀之語、雖此等無利害、極分明處亦不能免。是可歎已」。
- (14) 清水茂『韓愈』中國詩人選集11(一九五八)「解説」、五、六頁。
- (15) 『考異』卷二、古詩「和虞部盧四酬翰林錢七赤藤杖歌」の「照手欲把」という詩語の校勘。
- (16) 『考異』卷二、古詩「誰氏子」の「教誨」という詩語の校勘。
- (17) 『考異』卷五、「與孟東野書」という文章の「春且盡時氣向熱」の箇所の校勘。
- (18) 韓愈の詩文の引用は、屈守元・常思春主編『韓愈全集校注』(四川大學出版社、一九九六)を用いる。
- (19) 韓愈の詩語における語順の轉倒については、川合康三氏の「奇——中唐における文學言語の規範の逸脫——」(東北大學文學部研究年報三十、一九八一)に詳しい。
- (20) 鮑善淳『怎樣閱讀古文』(中國古典文學基本知識叢書、上海古籍出版社、一九八五)、九一、九二頁。増田榮次氏の翻譯(『漢文をどう讀みこなすか』、日中出版、一九九五)がある。原文は、「在先秦古文中、我們還可以看到一些作賓語的代詞、不需要任何條件、直接放在動詞或介詞前、……、熟讀三代兩漢之書的韓愈也注意到古文這一語言現象、并大量加以模倣」。
- (21) 他の例として、「諱辯」という文章の「不聞又諱治天下之治爲某字也」という箇所の校勘(『考異』卷四)では『顏氏家訓』を、「與于襄陽書」という文章の「抱不世」という箇所の校勘(『考異』卷五)では、『文選』を典故ではないと、朱熹は判斷している。しかしこれらの場合も同様に、判斷の根據は書かれていない。
- (22) 金谷治「疑古の歴史10 義理の當否、左驗の異同——朱子——」(『金谷治中國思想論集』下卷「批判主義的學問觀の形成」所

(23)

收、平河出版社、一九九七)、六六一—六八頁。

莫砺鋒「朱熹的『韓文考異』」(《朱熹文學研究》第七章、南京大學出版社、二〇〇〇)、三三六頁。原文は「我認識『韓文考異』是體現了朱熹的學術思想和學術作風的精心傑作」。